

二つの近代化論―島崎藤村「海へ」・保田與重郎「明治の精神」

黒田俊太郎

一 はじめに

雑誌『中央公論』に連載されていた島崎藤村の小説「東方の門」は、昭和一八（一九四三）年八月二八日の藤村の逝去を受け、未完のままに終わった。連載回数はわずか四回であったが、その創作ノートである「雑記帳」（い）（ろ）の記述を参照すると、小説「夜明け前」〔『中央公論』昭和四（一〇）を継ぐ時点から（大東亜戦争）に至るまでの時代を背景とした壮大な長編歴史小説が構想されていたことがわかる。

この「東方の門」に対する戦後の評者は、それが未完であるにもかかわらず―つまり、物語の（終り）がそれまでの展開を相対化し物語全体を意味付ける契機が永遠に失われているにもかかわらず、巨大な（空白）を各自埋めながら、「大日本帝国主義」や「民族主義」などのイデオロギーを読み込み、「祝詞小説」などと評した。昭和一七年一月三日（明治天皇の天長節）に帝國劇場で開催された第一回大東亜文学者大会（日本文学報国会主催）において、藤村の発声により聖寿万歳三唱がなされているが、そうした戦時体制に抗する姿勢を示さなかったという事実は、戦後の評者が「東方の門」の（空白）をそのよ

うな形で埋めていく格好の材料とされてもきた。

だがそれにもかかわらず、マイケル・ボーダッシュが指摘しているように、昭和二〇年代に形成された「近代日本文学の巨人としてのイメージ」は、藤村とファシズムとの関係性が忘却されながら継受され、藤村研究は次第に日本近代文学研究の中心へと迫り上がっていく。「東方の門」についても単に断罪するような論調は後退し、むしろ日本ペンクラブ会長でもあった藤村の「東西文化交流」を主題とする小説として肯定的に評価する動向も見られるようになっていく。とはいえ、目野由希が「藤村の場合でいえば、彼の日本ペンクラブ会長としての行動と、軍部に協力的であった姿勢は、当時の日本においてはことさらな矛盾ではなかったし、むしろ国際協調主義の自然な帰結との解釈も可能」としたように、肯定／否定という対蹠的評価が生成されてきた要因は、「夜明け前」の完成以後「東方の門」執筆に至る期間の、すなわちアジア・太平洋戦争という時局下における藤村の思考の両義的性格によるのかもしれない。とはいえ、藤村はこの時期にまとまった発言を行っていないこともあり、その思考を画定することは容易ではない。例えば、この時期の藤村のあり様をアジア主義という言葉で表象しようとする

る議論をしばしば見ることがあるが、アジア主義という思考の多義性により依然としてその〈不確かさ〉は解消されない。

アジア主義について考える際に必読の文獻・竹内好「アジア主義の展望」(『現代日本思想大系』9 『アジア主義』筑摩書房、昭和三八・八)について、中島岳志は竹内が同論でアジア主義を三つの類型に分類しているとして、それぞれ「政略としてのアジア主義」「抵抗としての―」「思想としての―」と命名している。各「アジア主義」の類型を順に要約すると、資源の確保などのためにアジアを膨張的に侵略するそれ自体帝国主義といえるもの、欧米列強の帝国主義により抑圧されているアジア諸国を救済しようとする義勇的精神、そうした義勇的精神を支える理論(岡倉天心のそれに代表される)、となる。そして竹内は、後者二つの「アジア主義」が出会えなかつたことでアジア・太平洋戦争は植民地主義的側面を持つに至つたと分析するのだが、そこには戦後のアメリカ民主主義に併合されていく現状を打破するための後者二つの「アジア主義」の有機的結合の可能性が模索されていたといえるだろう。

竹内が重視したアジア主義者の一人である岡倉天心は、「蹂躪されたる東洋にとつては、ヨーロッパの光榮はアジアの屈辱に過ぎぬ。」という現状認識に基づき、あの「アジアは一つである。」とのテーゼに到達するが、松本健一はそうした「(稿者注、天心の)現状認識は、その三十年後の昭和戦前の「近代の超克」論議にまで着実に引きつがれてい」くとする。事実、〈近代の超克〉論議が日米開戦後の昭和一七年七月に開催され

た座談会「近代の超克」を契機に前景化するのと、天心の先のテーゼが〈大東亜共栄圏〉思想へと転用されていくのとは、同時並行的な事態だった。しかし、柄谷行人が指摘しているように、「近代の超克」をめぐる思考は「一九三〇年代にさまざま思想家において出そろつてい」たのであり、昭和一一年二月の『新評論』創刊号における浅野晃の評論「文化の擁護」に小林秀雄や保田與重郎らが呼応し文壇の話柄へと肥大化していく〈日本的なるもの〉論議も、近代主義批判を基調とする〈近代の超克〉論議の前哨戦と位置づけることができる。

ところで、浅野の評論発表に先立つ昭和一一年九月一七日、藤村は日本ペン・クラブ会長として赴いたアルゼンチンの地で「最も日本的なるもの」と題する講演を行い、理念的基盤の大部分を天心に依拠しながら、日本の〈近代化〉について論及している。すなわち、昭和一二年の日中戦争開戦前後から晩年にかけての藤村の議論は、松本が指摘した天心と〈近代の超克〉論議とを結ぶ思考の系列を披いながら、日本やアジアの自律性を問題にする側面を持つていたと考えられる。実際、渡辺一民が『夜明け前』の磁場^(注15)と呼称し、中山弘明がその実態を明らかにしている昭和一〇年前後の「夜明け前」受容の問題、すなわち多くの知識人が「近代日本における文化的アイデンティティの危機」を脱する〈処方箋〉として「夜明け前」を理解しようとし、藤村に接近するという現象が存在していた。

だが、〈近代の超克〉論の一翼を担った日本浪漫派の保田與重郎も、この時期藤村に接近し藤村イメージの卓越化に大きく

貢献していたことについては、あまり知られていない。さらに、日本浪漫派同人が中心となって昭和一二年九月に設立された透谷会に、藤村が会員として参加していくとすれば、双方向的な思考の交流という事態をそこに見ることもできそうである。

本稿は、〈不確かさ〉の残る藤村晩年の思考を解明するための準備として、これまでほとんど議論の俎上に載ることのなかった藤村と透谷会、あるいは藤村と日本浪漫派、殊に保田與重郎との思想的連関について考察したい。その際、特に保田の評論「明治の精神」と藤村の航海記「海へ」に注目し、両者の〈近代化論〉を析出していく。次節ではまず、透谷会と双生児的組織といえる新日本文化の会の設立事情を見ていきたい。

二 文芸懇話会・新日本文化の会・透谷会

後に文芸懇話会として発足することとなる団体についての第一報は、『東京朝日新聞』の「警保局の後押しで／帝国文芸院の計画／まづ右翼大衆作家達を終結／非常時の文筆報國」（昭和九・一・二五）だった。ここでいう〈非常時〉とは、昭和六年九月の〈柳条湖事件〉以降に現出された鬱屈した現状変革の雰囲気それ自体と言っているが、この記事の四日後、内務省警保局長松本字は、直木三十五や国維会の酒井忠正らと懇談している。そこでは「文芸院」を創設すること、「日本精神の作興に貢献する作品」を選奨することなどが話し合われたとい^(注10)この当時、松本は警保局長として共産主義運動に対する苛烈で

執拗な弾圧を行っていたが（熱海事件、小林多喜二・野呂榮太郎の拷問致死事件）、今度は「右翼作家」「日本主義者」と表象される作家と結託し「日本精神」発揚の運動を開始したと報じられたのだ。三木清なども「帝国文芸院の計画批判」（『読売新聞』昭和九・一・二七）において、弾圧の当事者が新手の統制を始めたと直ちに警戒している。しかし、松本が結成を主導した財団法人日本文化聯盟傘下の団体として文芸懇話会は設立され、昭和九年三月二十九日には第一回会合が日本橋音楽園で開催されている。会員を列挙すると、島崎藤村・近松秋江・正宗白鳥・久米正雄・大仏次郎・長谷川伸・徳田秋声・広津和郎・豊島与志雄・横光利一・川端康成・菊池寛・中村武羅夫・加藤武雄・三上於菟吉・白井喬二・吉川英治・山本有三（計一八名。その後上司小剣・岸田國士・室生犀星・宇野浩二・佐藤春夫が入会している）。この一八名の内、メディアによって「右翼作家」と名指しされたメンバーは傍線を付した四名だけだった。そのためか、松本・直木・国維会ラインで構想されていたであろう「私設文芸院」案は簡単に否決されてしまう。メンバー構成は松本の意のままであり、「私設文芸院」案に肯定的なメンバー構成にすることも可能だったはずである。

この辺りの事情については、海野福寿の「文芸懇話会結成の過程は、学芸自由同盟が三木清・中島健三・小松清・田辺耕一郎らだけとなり、解散のための総会も開けず、立ち消えになったという衰退過程と並行する」との指摘が極めて示唆的である。^(注10)学芸自由同盟は、ナチスの焚書への三木や長谷川如是閑らの抗

議活動を契機として昭和八年七月一〇日に結成された団体で、翌年には同盟員が四二一名に達していた。そして、このような文芸統制の障壁となる「人民戦線の可能性を連想させる」^(主筋)「反ファシズム団体解体のために、同盟参加者である「自由主義者」を引き抜き、目の届く範囲に配置しておくことが、文芸懇話会を設立した松本の真の目的だったというのだ。実際、文芸懇話会会員の内、網掛けで示した八名は同盟員で、全体の半数近くに上っている。

だとすれば、松本のシナリオは以下のようなものだったのではないか。学芸自由同盟を解散に追い込むために、同盟員を含む自由主義的な所謂〈純文学作家〉を集めて、すでに集中的にメディアに喧伝させていた統制とプロバガンダのための「私設文芸院」案を会合で批判させ、それにあつさり屈服する。そうすることで、文芸を統制することも、文芸を利用して「日本精神」を発揚することも不可能であると自覚させられたという態度を示す。そうすれば作家たちはみな、心を許して参加してくるだろう。

こうしたシナリオが事実としてあったかは不明である。だが、その後の実際の展開は、それかなり近似したものとなる。第一回会合の席上、徳田秋声が「われわれとしては、このままほつて置いて貰いたい」と述べるとその他の〈純文学作家〉は皆それに同調したが、それに関して松本側が直ちに引き下がり、月に一度松本の招待により会合を行う団体として出発するという提案を行ったことに対しては、だれ一人拒む者はなく、全員参

加という形で出発することとなったというのだ。^(主筋)

しかし、松本がこの一件で自らの構想を放棄したとは考えられない。昭和九年九月一九日、文芸懇話会は〈物故文芸家慰霊祭〉という明治期以降の物故文芸家を慰霊するという奇妙な儀式を開催しているが、これについて副田賢二は「近代文学」という系譜性の内に自らを歴史化しようとしていた当時の〈作家〉たちにおける自己顕示的な文学〈展示〉の願望」の具現化を見いだす。すなわち、〈物故文芸家慰霊祭〉とは、〈作家〉が自身の身体性を文学史へと痕跡化するために自らが企画したイベントだったというのである。だが一人白装束を身に纏って〈物故文芸家慰霊祭〉の会場に現れ、イベント終了後、「初めてのだった松本の願望とは、そうした作家の願望とは逆行するものだったのではないか。坪井秀人は「戦時下」における詩表現について「マテリアリスティックな〈個〉と言葉の表出(《言語上の唯物主義》)は抑圧され、そこでは《肉体を紛失した者》たちは画一的な〈国体〉という肉体Ⅱ制服が支給され、同じ方向に向けて《整列》させられ」^(主筋)ていったとする。これと同じように、白装束に冠をかぶった祭主松本が祭文を読み上げることが始まった厳かな神式の祝祭において、作家たちは、文字通り《肉体を紛失した者》である物故文芸家という〈死者〉の祀られた祭壇に向かって《整列》させられることによって、自らも《肉体を紛失した者》に知らぬ間に参入させられようとしていたのではないか。

文芸懇話会という月に一度会合を行うだけのはずだった団体
が、最初に行ったのがこの〈物故文芸家慰霊祭〉というイベン
トだったという事実は、それが作家と松本どちらの側からの提
案だったにしろ、そこには〈身体性〉の奪還と剥奪という「肉
体」を巡る攻防戦が繰り返られていたといえるのではないか。
このような攻防戦は幾度となく繰り返されただろうが、松本の
方では自らの方が分があるという手ごたえを着実に得てゆく。

昭和一〇年二月二日付の松本の日記には「徳田氏が文芸院
に賛成した。宇野正志君・佐藤君等が材料を蒐集しておるので
早速調査を命じておいた。とう／＼こゝまで来た。」^(注20)とある。
この不気味な実感、第一回の会合で「私設文芸院」案に反対
した徳田秋声が「文芸院に賛成した」こと、そして実態は明ら
かではないが、「調査」を「命じ」られた佐藤がその命令に従
い始めたこと、に由来していた。それはこれまでばらばらに行
動していた作家たちが、文芸懇話会という共同体の範囲内で整
序化され、松本の指し示す方角へと主体的に歩み始めたこと松本
には理解された。むしろ、この段階でこの全体主義的方向性が
特定のイデオロギー的磁場を帯びる必要性はなかったたのであり、
また特定のイデオロギー性を持つことが出来ないというのが文
芸懇話会の限界だった。そうした限界は、はしなくも佐藤春夫
という〈従順〉な作家の脱会という事態によって露呈すること
になる。

昭和一〇年七月一七日、第一回文芸懇話会賞を決定する会合
が開かれた。これより二日前、推薦カードによる投票が行われ、

横光利一『紋章』、島木健作『癩』への授賞が決定していたが、「左
翼のシンパ」^(注26)であるということで松本が『癩』への授賞を握り
潰してしまふ。これに憤慨した佐藤は脱会するのだが、〈従順〉
なはずの佐藤のこの行動は、松本にとつて意外なものだったに
違いない。そんな佐藤が「日本的のもの」の台頭して来た「此
氣運に乗ずべく、文士、詩歌、学者達のグループを作るべきだ」^(注27)
と松本に持ちかけてきたとき、松本の喜びはひとしおだった。
この時の様子を佐藤は「松本氏に説を発表すると松本氏は案を
拍たんばかりに賛成し」^(注28)たと回想している。

松本にとつての文芸懇話会の終極の目的とは、作家自身が主
体的に「日本精神」の発揚という同じ方向に「整列」する共同
体となる事だった。ゆえに林房雄が「文芸懇話会」は明らか
に松本学氏主導者として働いた。(中略)だが、今度は逆である。
作家の方が先に動いた。(佐藤春夫、中河與一氏が肝煎りであ
つた。)^(注29)と、新日本文化の会が佐藤・中河という作家主導で成
立したことを誇らしげに主張する時、文芸懇話会設立から足掛
け四年、選奨時を除きイデオロギー的な口出しをすることなく、
作家の自発的服従を勝ち取ったと松本には理解されただろう。

この直後の昭和一二年七月一七日、文芸懇話会は解散し、翌
日には同じく日本文化聯盟傘下の団体として新日本文化の会が
設立されるのである。翌年一月には機関誌『新日本』が創刊さ
れているが、中核的な役割を担ったのは、同年八月に解散する
『日本浪漫派』同人だった(佐藤、保田、林、三好達治、中河、
萩原朔太郎、芳賀檀の七名)。編集委員全七名のうち日本浪漫

派は、佐藤、保田、林、中河、萩原の五名に上り（他二名は浅野晃、藤田徳太郎）、また第三号からは三好、芳賀も編集委員に加わっている。すなわち、参加した『日本浪漫派』同人全てが編集に携わったことになるが、日本浪漫派が解散した八月には伊東静雄・山岸外史・亀井勝一郎・神保光太郎ら旧日本浪漫派がさらに加入している。すなわち、〈日本的なるもの〉という理念のもと、新日本文化の会という団体を間借りする形で、『日本浪漫派』同人は組織の再構築を図ったと考えられる。そして、問題の透谷会が発足するのは、新日本文化の会設立の二か月後の昭和一二年九月である。委員を列挙すると、佐藤・藤村・戸川秋骨・中河・萩原・武者小路実篤・与謝野晶子・吉江喬松・保田（左傍線は日本浪漫派、傍線は新日本文化の会会員。保田は昭和一三年より）。透谷会の設立を主導したのは、やはり新日本文化の会の設立に携わった中河與一だったことに加え、設立時期の近接性とメンバーの重複の度合からみても、両者の関係性の深さは明らかである。萩原朔太郎が反語的に「尚この透谷賞が、新日本文化の会と全然無縁の別物であることも一言しておかう。」と述べているように、これら二つの団体は〈日本的なるもの〉という旋律と通奏低音を繰り広げる双生児であると見る事ができるだろう。

本節では、文芸懇話会を設立した松本学の視点から、新日本文化の会の設立に至る経緯と、作家たちが〈日本的なるもの〉という標語のもとに整列し統合されていく様子を見てきた。しかし、〈従順〉に見えた佐藤・中河を含め日本浪漫派周辺で議

論された〈日本的なるもの〉は、松本がイメージしていたような非合理的・封建的な「日本精神」発揚のイデオロギーとは様相を異にするものだった。

三 日本浪漫派周辺の〈日本的なるもの〉

日本ペン・クラブの創立（昭和一〇・一一）に際し主事に就任し、藤村の国際ペン・クラブ大会出席にも同行した勝本清一郎は、戦後、透谷会を日本浪漫派が設立したものと措定しながらその行為の罪科を追及し、その一方で、旧日本浪漫派の「戦犯的文士」によって藤村の全集が編纂されていることに憤慨している。勝本は、藤村と日本浪漫派との接点を否定することで藤村が〈犯罪〉に加担した事実などなかったと主張したかったかもしれないが、「戦犯的文士」として名指しされた亀井勝一郎の方では、「晩年の藤村は、「夜明け前」をかきつつ、日本浪漫派を探求してゐたやうである。」と、藤村の日本浪漫派への接近に言及している。もともと藤村が念頭に置いていたのは、上田秋成や本居宣長から透谷、天心に至る浪漫派の系譜のことだったが、透谷会と日本ペン・クラブの運営資金が、いずれも藤村のバトロンである大倉喜七郎の出資によるという事実は、単に藤村の日本浪漫派の思考への接近を示すのみならず、本稿冒頭で述べた藤村の思考の両義的性格、あるいは〈不確かさ〉を象徴するようである。では、藤村は透谷会の理念のいかなる部分に共鳴し、可能性を見出していったのであろうか。

先述したように、透谷会は「日本的なるもの」という理念のもとに設立されたが、河田和子によると、「日本的なるもの」に関する文献は昭和四年から散見され始め、満州事変後の昭和七・八年頃のファシズムの傾向の昂進とともに文献数は増加し、昭和一二年にピークを迎えるという。^(注36)これは昭和初年代の建築界で「日本的なるもの」が主要なテーマとなっていたこととも関係しているだろうが、昭和一二年に噴出する「日本的なるもの」論議は、論者達のイメージする「日本的なるもの」が各々差異を孕んでいたにもかかわらず、既存の論議とは決定的に異なる共通した言説構造を分有していたと考えられる。

稿者がかつて、「日本的なるもの」論議の原初的地点を探ることには左程意味はないとしつつも、浅野晃本人や小林秀雄、中島健蔵らの証言から、浅野晃「文化の擁護」〔「新評論」昭和一一・一二〕が重要な転換点だったと論じたことがある。^(注37)浅野「文化の擁護」の重要性は、昭和一年の文壇ジャーナリズムの話柄の中心だった三木清の「ヒューマニズム論」への駁論の形を取りながら、三木の「ヒューマニズム論」が提出した思考の枠組を、自身の議論のプラットフォームとして採用し、日本人のナショナル・アイデンティティの問題へと昇華させた点にある。浅野は『日本浪漫派』同人に加わっていないが、新日本文化の会の機関誌『新日本』の編集委員に日本浪漫派の林房雄・中谷孝雄により推薦されたように、言論活動において日本浪漫派と濃密な関係を構築していた。^(注37)同論は小林秀雄の文芸時評「(2) 伝統制約性 浅野晃氏の「文化の擁護」」〔「東京朝日新聞」

昭和一一・一二・二六、五面）といった反響を呼び、以後の「日本的なるもの」論議が潜在的に三木の「ヒューマニズム論」への肯定／否定の表意を含むものとなる先鞭となる。そうした理由から、ここでは浅野の「日本的なるもの」論を概観し、日本浪漫派に共有された「日本的なるもの」という理念を演繹的に考察してみたい。ちなみに「故郷を失った文学」〔「文芸春秋」昭和八・五〕で、「故郷」＝「伝統」の喪失について語った小林秀雄が、「伝統は何処にあるか。僕の血のなかにある。若し無ければ僕は生きていない筈だ。こんな簡単明瞭な事実はない。」として、「伝統」の所在を「血のなか」に見出していくのは、同じ連載中の文芸時評「(1) 伝統性と近代性 佐藤春夫氏の『鷗外論』」〔「東京朝日新聞」昭和一一・一二・二五、七面）であり、そうした問題意識の延長線上に浅野の「日本的なるもの」論は位置づけられていたと考えられる。

三木の「ヒューマニズム論」の要点は、満州事変以後のパラダイム、すなわち国際連盟脱退（昭和九）により国連的世界秩序ないしワシントン体制に背を向けた（現在）の日本・日本人が抱える「不安」を、「日本／西洋」という弁証法的構図における自己同一性の「不安」であると認識する枠組を提出した点にあった。すなわち、明治以降の「近代化」とは、「日本民族—日本文化」、「日本人の身体—日本人の精神」といった「安定的」な心身二元論的対応関係に、「西洋文化」〈西洋人の精神〉が闖入してくる過程であり、「不安」はそれによる「パトス／ロゴス」の「乖離」により齎されると説明したので。その上で

三木は、同時代の多くの知識人の日本回帰的動向を、日本人の〈パトス〉に適合的な〈ロゴス〉^(注28)。『民族的なもの、伝統的なもの、日本的なもの』への帰還願望の表徴とし、そうした現状を「知的闘争からの撤退」であると批判するとともに、〈西洋的なもの〉のパトス化（西洋文化の積極的な受容）と、〈日本的なるもの〉に含まれる〈普遍性（世界性）〉の自覚とが必要であると、近代主義的な自己定位から主張した。^(注29)

これに対し浅野は、「スペインの内乱」として顕在化した〈西洋〉における精神的危機^(注30)。『不安』の原因を、「民族的」なるものの「特殊性」の喪失^(注31)。「一般化」として定式化し、これを日本の状況に敷衍していく。そして、〈日本的なるもの／西洋的なるもの〉が不調和に並存することで、「現代日本文化」を持たない「われわれ」は、「民族」としての意識的な主体としての資格を欠いて^(注32)おり、もはや「日本人でも西洋人でもない」というのだ。だが浅野は、こうした「民族」としての自律的性格の〈欠如〉を憂う一方で、そうした〈欠如〉を逆手に取り、それを「民族」の優越性へと一気に反転させる「ロマン主義」の一手に出る。^(注33)すなわち、〈西洋的なるもの〉の侵犯を甘受することは「民族」としての自律性を手放すことに他ならないが、「インドや支那」といった他のアジア地域が西洋に植民地化される一方で、日本が「独立を保全」し「帝国主義国家にまで発展」できたのは、闖入してくる〈西洋的なるもの〉を取り込むことができるという〈日本的なるもの〉の性質の賜物であり、そこに「民族」としての卓越性があるというのだ。^(注34)酒井直樹は、

「近代」を歴史的順序及び〈西洋／非西洋〉という地政的關係において認識しようとする「歴史―地政的図式」が、「西洋という仮想された同一性」を定立するために一九世紀の〈西洋〉で確立されたとするが、そのような西洋的な要請^(注35)。『言説装置が排除したかった〈近代的〉非〈西洋〉』として、浅野は日本・日本人をイメージしていく。〈日本的なるもの〉は「多分に西歐的」^(注36)だというのだ。

昭和十一年二月二六日に起こったクーデター事件の際、三木は事件を契機に「ファツシズムの「合理化」が進むと予測している。^(注37)すなわち、「封建的な非合理的な要素」を胚胎した「旧型の日本主義者」の淘汰を伴う、「西洋哲学」や〈西洋〉の「ファツシズム理論」で武装した〈新日本主義〉イデオログの台頭である。三木が想定したのは、おそらく保田與重郎を中心とする日本浪曼派の躍進だろう。実際、日本浪曼派の林房雄は、プロレタリア文学の衰退後に興った「ヒューマニズム論議の正當にして当然たる発展が「新日本主義」^(注38)だという見取図を示している。林は「プロレタリア文学」の「階級性と国際性の理論」による「人間性の擁護と解放」の不可能性の自覚が、「日本的なるもの」による「人間性の擁護と解放」の主張である「新日本主義」を生じさせたことの必然性を見るのである。その意味で〈新日本主義〉のイデオログの登場に、三木も加担してしまつたといえなくもないのだが、三木の〈ヒューマニズム論〉の枠組を逆説的に踏襲し、「民族」の自律的性格の〈欠如〉と「民族」の優秀性とを同時に主張する反語的両義性の言説を携えて

登場した、自称「ヒューマニスト」^(註七)の浅野もまた、〈新日本主義〉の新たなイデオログに他ならなかっただろう。

では、彼ら日本浪漫派周辺の〈新日本主義〉イデオログたちのいう〈日本的なるもの〉とはいかなるものであったか。浅野の評論「明治七十年」(『新評論』昭和二二・四)の表題が端的に示すように、彼らが問題にしているのは、「明治維新」以後の日本についてであり、未了の「明治」としての〈現在〉についてであった。林は、「明治元年の劣等国」が「明治四十年に「一等国」となり、「三大強国」となった「明治以来七十年間」を「世界歴史始つて以来の大飛躍」とし、「民族性の秘密」探求のための「明治時代の探求」を要求している。保田もまた「日本的なるもの」を主題とした評論の中で「奇跡」は明治にある。^(註八)とする。保田が「明治の精神」と呼んだ思考については次節で検討するが、いずれにせよ日本浪漫派周辺の〈日本的なるもの〉論議とは、常に「明治」を意識したものであったのであり、それらの言説には、日本が近代国家として自律性を確保しようとする時に付随するジレンマが畳み込まれている。彼らは一方で植民地化に抗し列強に伍していくための〈西洋化〉を高らかに謳い上げ、その一方では常に〈ロゴス／パトス〉の「乖離」を知覚し、〈ロゴス〉が〈西洋〉に植民地化される意識を共有していた。

もっとも、彼らに共通する「明治」という時代への歴史認識は、急激に高進する物質的・社会的な〈西洋化〉にも拘らず、〈世界文化性〉¹¹ 〈日本的なるもの〉が喪失される以前の時代とす

るものである。〈世界文化性〉が墮落¹² 植民地化するの、例えば保田は日露戦争より後と見たのであり、亀井勝一郎は第一次世界大戦後の菊池寛に代表されるような現実主義の時代と見たのだが、ここでは日本浪漫派周辺の〈日本的なるもの〉論議を、「明治」以降の〈近代化〉を反語的両義性において捉えていく思考とひとまず結論付けておきたい。

四 透谷の闊った〈戦争〉——保田與重郎「明治の精神」

前節では、透谷会の理念的背景としての〈日本的なるもの〉論議の概要を整理したが、藤村と透谷会の共振を補足するためには、もう少し掘り下げた議論が必要であろう。そこで本節では先に予告した通り、保田與重郎の評論「明治の精神」(『文芸』昭和二二・二、三、四)を核に据えながら、昭和一〇年前後の保田の〈近代化論〉を検討していきたい。

保田を検討するのは、彼が日本浪漫派を代表するイデオログだったからではなく、保田が「世界の観念」(『作品』昭和一〇・九)、「有羞の詩」(『コギト』昭和一〇・八)、「透谷に關して」(『文芸懇話会』昭和一一・二二)、及び「明治の精神」において繰り返し北村透谷の再評価を行っており、そこで成型された透谷表象が、透谷会設立の発起人であり実務を一手に引き受けていた中河與一の透谷イメージに決定的な影響を与えたからである。この頃の中河の思想は、「犠牲」の観念に裏打ちされた〈民族〉の「永遠」性を主張する全体主義的傾向を強めて

いたが、^(注4)「彼（稿者注、保田）が「他界の観念」の中で述べてゐる事は、永遠思想への回帰といふ意味であつて、彼は透谷を説明しながら、この崇高の観念を説き明さうとした。」^(註5)と興奮気味に語つたように、中河は保田の一連の言説と遭遇すること、自身が主張する「永遠思想」の実践者としての〈透谷〉を週及的に発見し、透谷会の設立に乗り出すこととなるのである。いわば、藤村を含めた透谷会のメンバーが概ね共有することとなる透谷表象の原型を保田が創出したと考えられるのだ。保田の方でも、「今年の重要な事件としては、日本の浪漫主義文学のために透谷賞が設定され、その第一回が中河與一氏の「愛恋無限」に決定した。透谷賞が透谷の精神作風の継承を一部の主旨とするならば、この決定は可とすべきである。」などと、透谷文学賞の設置と中河の受賞を昭和一二年の文芸界を飾る唯一の「事件」として歓迎している。さらに、保田の「明治の精神」を含む評論集「戴冠詩人の御一人者」（東京堂、昭和一三・九）が第二回透谷文学賞を受賞し、これ以降保田も透谷会委員に迎えられるのである。

ところで、保田の一連の言説は、藤村を卓越化する装置としても機能していた。それゆえ、保田を委員に迎え入れるまでの過程は、藤村が自分に差し向けられた表象を受け入れる過程とすることもできるかもしれない。実際、保田が透谷や藤村を媒介としてイメージした〈近代〉は、次節で見えていくような藤村が描く〈近代〉と重なりあつてもいくのである。すなわちここで実践しようとしているのは、藤村の透谷会入会という事実の

背後にある思想的共振という事態を補足するために、一方に保田の〈近代化論〉を、他方に藤村の〈近代化論〉を据えるという作業であるとすることができる。

では、これより保田の〈近代化論〉を見ていくが、まず保田が提出した透谷表象を確認しておこう。

透谷の子供つばい主張に、僕は一般明治の精神が主張せねばならなかつたもの、彼らの詩的祝楽の日にさへ悲しくも周囲をつゝんだ野蠻への挨拶の、最も明白で勇敢で率直で勇らしい現れの一つを見る。（中略）彼らは自分の詩情の昂揚をうたふべき日の中に於て、文化の防衛をその最低なもの、主張でなさねばならなかつた。さういふ露骨な一例として僕はこゝに透谷をひく。^(註6)

ここでイメージされている〈祝祭的空間〉は、『校注 祝詞』（私家版、昭和一九年・四）で明確にその重要性が強調されることとなる、神の「事依さし」（依頼）を受けて働く生活Ⅱ稲作による祭りの生活に連続していくような共同体であり、透谷が行つたとされる「野蠻への挨拶」とは、「明治維新」以後の混沌とした〈近代化〉の過程で、「文化の防衛」Ⅱ「系譜の樹立」を果たそうとしたことに他ならない。周知のように、保田の文業の主眼は、後に〈後鳥羽院以後隠遁詩人〉として体系化される系譜、これは「古事記」の時代から日本の文芸を内部から支えてきた精神の〈発生〉の系譜であり、そうした文芸を創出した〈詩人Ⅱ英雄〉の「血統」を樹立することにあつた。

ここで透谷は、〈近代〉における最初の〈詩人Ⅱ英雄〉とし

て系譜付けられているのだが、『戴冠詩人の御一人者』の「緒言」で保田は、「戦争は一箇の叙事詩である。」といい、「蒙疆や満州支那の大陸にゐる我らの若者」に対し「彼らは剣と詩によつて、知識と秩序の変革を始めた」として、兵士達たちの〈剣による変革〉と詩人の〈詩による変革〉とをその目的において同列化していく^(注54)。それは戴冠詩人の御一人者^(注54)と大和武尊が武人であり詩人であつたように、詩人が〈俗世〉との抽象的な〈戦争〉を闘うことを常とする限り、本質的に武人でもあるといふのであり、逆に「変革」のための現実の戦争を闘う兵士は「叙事詩」を誦う詩人であるといふのだ。もつとも、「尊の悲劇は東征にある^(注55)。」とされるように、尊の〈征伐〉が「勝利」という形で結果するとき、その結果の内には常に「敗北」が準備されていた。保田は「勝利のもつ敗北の場所の熟知^(注56)」という言い方をするが、「勝ち進むことは徹底した非情^(注57)」を「敵」に示威することであり、そこには「悲劇」＝「敗北」が内在している。

こうしたイメージとしての〈戦争〉と実際の戦争とを無媒介に癒着させる認識や、「敗北は同時に人間の勝利のイロニー^(注58)」といったイロニー観は、「この戦争が例へ無償に終つても、日本は世界史を画する大遠征をなしたのだ。(中略)今戦争が無償に終る時を空想しても、実に雄大なロマンチズムである。」^(注59)などとした保田の『蒙疆』(『新潮』昭和二三・一一)において顕著になつていくのだが、尊にとつての真の「悲劇」は、こうした祭から遊離した〈征伐〉という行為が神を嘆かせ、それにより「神との同居を失ひ、神を畏れんとした日の悲劇^(注60)」である。

保田は尊の「詩」が発生する由縁を神人分離の「悲劇」に見出し、さらにあらゆる偉大な「詩」を「悲劇の上」にのみ開くやうな花^(注61)と捉えることで、〈詩人＝英雄〉の「血統」を「偉大な敗北^(注62)」の系譜^(注62)＝〈後鳥羽院以後隠遁詩人〉として定位していく。そしてこの〈偉大な敗北の系譜〉に、透谷―藤村は据えられることとなるのである。

保田は、藤村の当初の「小説体系」には「大きな空所」があり不完全だつたとする。〈読者〉はその「空所」に「透谷の悲しい若い心情」＝「悲劇」を補填し、体系を完成させる必要があつたといふのだ。藤村の小説が、あらゆる偉大な「詩」が胚胎する〈悲劇〉を獲得し、「西洋に対抗しうる国民文学」となるのは、『夜明け前』に至つたときである。「国民文学」としての『夜明け前』が「陰雨に湿つてあ^(注63)」たのは、そこに藤村自前の〈悲劇〉が明確に描かれていたからだ。保田はこの『夜明け前』に〈現在〉の日本は「支へ」られていくとまで感覚していく^(注64)。

保田のいう「明治の精神」とは、日本の〈文化〉を防衛してきた精神の「血統」に連なるものでありながら、「十八世紀の克服^(注65)」＝〈近代化〉を履行する世界精神に他ならない。桶谷秀昭が既に指摘しているように、保田はしばしば〈近代化〉否定論者と誤解されてきたが、保田は「我国に新しい洋館を作るならば、その建築には一切「日本的なもの」を排して、専らすぐれた西洋を移し植うべきである^(注66)」とし、〈西洋〉への「崇拜と模倣とつひの建設と、この三位一体^(注67)」の完成を主張していた。

むしろ、日露戦後のパラダイムにおけるその挫折が、「剣と詩」による変革を要する（現在）、すなわち皮相的な「今日の文化的西洋化」＝文化的植民地状態を現出させたのであり、〈近代化〉を文字通りやり直すために「われらインテリゲンチヤ」のもつ西欧＝〈借用論理〉を「焼却」せねばならないとするのはそのためだった。ここに保田の〈近代〉批判が持つ原理主義的性格の根拠がある。

「国家と文化の建設」——明治という時代はこの二つの事業を成し遂げることで、〈近世／近代〉（日本／西洋）を「新しい日本の橋」で架橋し、〈近代的〉非〈西洋〉として自律しようとした。しかし、「国民独立戦争」として「勝利」せねばならなかった、日清・日露の二つの戦役に向け、高揚した皮相的精神である「実利主義」は、透谷らの「近代市民文化的浪漫主義」の建設という事業を駆逐していく。国家の被植民地化の回避のために、文化の被植民地化を選択したのが日本の〈近代化〉であり、その意味での〈近代化〉は否定されねばならない。透谷が闘い、そして「敗北」（自殺）を余儀なくされたのは、この植民地的知性を相手とする〈戦争〉である。そして、この〈戦争〉をたった一人で（現在）も闘い続けているのが藤村だと、保田はいうのである。

五 エトランゼエというイロニー——島崎藤村「海へ」

こうした保田の〈近代化論〉・透谷表象・自身に差し向けら

れた表象を、藤村は全面的に引き受けたのだろうか。先述した傍証があるとしても、藤村がそれについてどう考えていたかの記録はない。だが、保田の藤村表象が生成された要因は、藤村の〈近代化論〉の内に伏在していたのではないだろうか。

大正二（一九一三）年から大正五年までの渡欧体験が、藤村の〈近代化論〉に大きな転換を迫ったことはよく知られている。上海・香港・新嘉堡・スエズ運河などを船で経由しマルセーユに至る経路は、さながらアジア諸国が欧米諸国の植民地と化した惨状を回覧する旅だったが、帰国後に執筆された往復の航海記としての性格を持つ「海へ」には、藤村の心に小さく燃焼したアジア主義の灯火となぜ日本だけが植民地化されなかったのかという思想的課題とが確認できる。

僕は斯様な風にも考へる。印度や埃及や上耳其あたりに古代と近代としか無い、と言つた人の説には全く賛成だ。幸ひにも僕等の国には中世があつた。封建時代があつた。長崎が新嘉堡に成らなかつたばかりぢやない。僕等の国が今日あるのは封建時代の賜物ぢやないかと思ふよ。見給へ、日本の兵隊が強いなんて言つても、皆な封建時代から伝はつて来たものの近代化だ。（中略）まだ前世紀が自分等の中に生きて居るやうな氣のすることも有る。

ここで「僕」（地の文では「私」）は、日本が欧米の植民地化を免れたのは「中世」＝「封建時代」の「賜物」であるとすると、今谷明は、日清・日露戦争における勝利の結果、明治維新以降痛罵されてきた封建時代が、〈西洋〉諸国にも存在した歴史的

一段階として歴史学者三浦周行・法学者中田薫・経済学者福田徳三らにより再評価され、また原勝郎『日本中世史』（富山房、明治三九・二）が初めて「中世」という語を用いて日本の歴史を構造化するなど、「中世」を「封建制」そのものと捉え顕彰する思考のモードがあったとし、藤村もそうした流れの中に位置づけられるとする^(注20)。実際、藤村は昭和一六年一月に脱稿したとされる草稿「回顧（父を追想して書いた国学上の私見）」^(注21)の中で原の『日本中世史』に言及していくのであるが（藤村の読書体験の時期はわからない）、酒井一臣が指摘しているように、原の目的は「細部を演繹して日本と西洋の類似性を浮かび上がらせること」、「欧米諸国からの「遅れ」を常に意識していた当時にあって、日本の近代化は不可能ではないことを示す」ことにあり、いわば「実証性に欠けた「シヨウキニズム」としての側面があった。ゆえに〈中世の発見〉ということ自体は当時としても新鮮なものではなく、またともすれば排外思想の再生産に加担しかねないものだったのである。

しかし、藤村の〈中世の発見〉における重心は、日本にも〈西洋〉と同様に〈中世〉が存在したことにではなく、自身が抱いていた〈近代〉イメージへの懷疑＝否定ということに置かれていた。

すなわち、「私達が青年時代から次第に感知して行つた近代の精神は西洋の文物に接触して初めて開発されたものだといふ考へ」は誤りであり、〈近代〉は「元祿の昔にすでに／＼その曙光を發して居」た、そして「芭蕉の詩と散文、西鶴の小説、

近松の戯曲等」の芸文に「その精神のあらはれ」を見出すことができる^(注22)と自覚されたのである。もつとも十川信介によれば、こうした藤村の自覚については亀井勝一郎『島崎藤村論』（新潮社、昭和二八・一二）が最初に注目していたといふのだが、そうした最初の指摘が日本浪漫派同人だった亀井によってなされたことの意味は小さくないだろう。なぜなら、自らが生きる〈近代〉、ないしそのイメージが仮象であると否定を繰り返し、未だ実現されていない真正の〈近代〉を想像＝創造的に表象し続ける方法こそ、保田に代表される日本浪漫派の性格を決定づける「イロニー」に他ならないからである。

保田の「イロニー」は、フィヒテ『全知識学の基礎』における弁証法的自我哲学の思弁を転用した、ドイツ・ロマン派のフリードリヒ・シュレーゲルの「イロニー」の影響下にあつたとされるが、フィヒテにおいて、絶対的自我的定立は、経験的自我を制限し非我を定立することであり、ゆえに経験的自我的抑制は絶対的的自我確立の契機であるとされる。すなわち、絶対的自我としての真正の〈近代〉の定立のために、経験的自我としての〈近代〉の否定が弁証法的に反復される必要があるとする主張と、保田の「イロニー」も要約可能である。

ところで、藤村の航海記「海へ」は、こうした保田の「イロニー」の構図を、日本浪漫派の登場以前に先駆的に描出している。

『略』多少なりとも僕等が近代の精神に触れ得るといふのは、あの阿爺達に強いものが有つたからだ。それに触れ

得るだけの力を残して置いて呉れたからだ。僕は左様思つて来たよ……いえ実際、父の愛といふやうなものを喚起したのも、寂しい外国の旅だつた……』

エトランゼエは黙つてこの私の話を聞いて居たが、藤椅子を離れて起上る際に、『君もなか／＼話せる、しかし君の言ふことは半分は寢言だ』といふ眼付をした。^(注8)

「私」は、先の引用部分に続けて右のように、自分たちの世代が「近代の精神」に触れることができた理由を、「阿爺達」世代の〈強さ〉にあつたと分析し、それを対話相手の「エトランゼエ」(外国人)に披瀝している。ここでは「私」の発言内容ではなく、「私」がそれまで考えてきた〈近代〉イメージを「私」が懷疑〓否定し、新たな〈近代〉イメージ構築への契機としていることに注目したい。

重要なのは、「私」の〈近代〉イメージへの懷疑〓否定の言説に対し、「エトランゼエ」が「君の言ふことは半分は寢言だ」という「眼付き」をこちらに差し向けていると「私」が知覚していることについてである。

「エトランゼエ」は「私」の言説は「寢言だ」などとは言つておらず、「私」が〈他者〉の眼差しという記号に一方的に「私」への批判の意味内容を付与することで、「私」は〈自己〉を相対化しているのである。この「エトランゼエ」について岩見照代は、「海から来たという人」という記述をもとに〈エトランゼエ〓海〉とし、日本／異国、彼岸／此岸、生／死、自己／他者などの〈境界〉を表象する存在であるとしている。^(注9)だとすれ

ば、「私」と「エトランゼエ」との対話は、「私」が「私」の中に作り出したもう一人の「私」との自己内対話とすることもできる。「私」は自らが抱く〈近代〉イメージは仮象であると懷疑〓否定するが、そうした懷疑〓否定の言説をさらに懷疑〓否定する「エトランゼエ」というもう一人の〈自己〉を〈自己〉の内部に立ち上げ、いわば懷疑〓否定を増幅させることで、真正の〈近代〉イメージに接近しようとするのである。

野坂昭雄は、保田の「イロニー」を説明する際、「芸術家は自分の本心を偽る必要があり、それを自己の二重化と言うべき現象によって遂行するのである。外界における対立は内面(〓「僕のなか」)に転化され逆転されるが、ここには一種のねじれた関係が生じていると言える。」^(注10)としているが、「私」が〈近代〉をイメージする際に行っているのは、正にそのような「自己の二重化」ということに他ならない。またそれは、仲正昌樹の「作品の中で語る主体が自己自身をより高みから見て自己相対化する動きは一般的に〈イロニー Ironie〉と呼ばれているものである。」^(注11)とする要約とも正確に符合する。

こうした「私」の語りに内包された無限の自己相対化の契機は、もう一人の〈自己〉である「エトランゼエ」によってこれ以後も繰り返し齎される。

『試みに僕から離れて見給へ。それが君に出来たら、えらい。君は僕から離れたつもりでも、僕はもう絶えず君に働いて居る。一旦海の洗礼を受けたものが、どうして心に革命を引きささないで済むものか。』^(注12)

「エトランゼエ」のこの発言は直前の「愛国心」に関する「私」との対話を受けたものだ。ひとたび「海の洗礼を受け」る¹¹国境線を意識することで自己相対化が開始されてしまえば、いわば〈国家〉や〈近代〉というものの輪郭を意識しそれを懷疑した刹那、無限の自己相対化という否定を伴う〈心の革命〉が開始する。

『帰つて行つて見給へー君の国の神戸が殖民地のやうに見えるなかつたら仕合せだ。』

エトランゼエは半分私に調戲ふやうにして笑つた。^(注10)

もう一人の〈自己〉である「エトランゼエ」は、数年ぶりに見る日本の風景が「殖民地」のように映じて欲しくないという「私」の淡い期待を見透かし、それを「殖民地のやうに見えるなかつたら仕合せだ」と、嘲弄的^イ反語^{ロニカ}的に否定する。実際、上海で「エトランゼエ」と別れ、帰国した「私」の眼前に広がった「お前」¹²「隅田川」兩岸の光景は、「雑然紛々たること恰も殖民地の町^(注11)」を髣髴とさせるものだった。日本には〈中世〉があったことで、他のアジア諸国のように植民地化されることなかったということを〈発見〉した「私」は、それでもなお〈ある地点〉において、他のアジア諸国と同様に〈西洋〉の〈植民地〉であることに突き当たるのである。

しかし吾儕日本人が余りにクラシックを捨て過ぎたと気付くことは決して遅いとは言へない。吾儕は広く知識を世界に求める程の鋭意と同情とに富んで居る。唯吾儕はそれを受納れるに当つて強い判断力を欠いた。言葉を更へて言

へば歴史的の意志を欠いた。それが吾儕の欠点だ。吾儕は自己の支配者では無くなつて了つて居た。唯新しいものが入つて来るに任せて居た。お前の岸にある不思議な不統一^(注12)。「日本人」である「私」は、いつの間にか「エトランゼエ」(外人)が自らの内に深く浸透していることに気付いてゆく。「エトランゼエ」が「試みに僕から離れて見給へ」とやはりイロニカルに予告していたように、「エトランゼエ」は「離れ」ることなど出来ない〈自己〉の一部となつていた。しかも「判断力を欠いた」知識の摂取のために、「日本人」は「自己の支配者」としての権限も既に失つている。

だが、こうしたジレンマが「私」を「シヨウキニズム」に走らせることはなかった。「私」は冷静に、もう一人の〈自己〉である「エトランゼエ」との対話を続けることで真正の〈近代〉を掴みとろうとする。

吾儕に必要なことは国粹の保存でなくて、国粹の建設でなければ成らないのではないか。吾儕はもつとく〈欧羅巴から学ばねば成らない。そして自分等の内部にあるものを育てねば成らない。〉^(注13)

「私」が「海へ」(大正五〜七)で決意した〈心の革命〉を遂行するための〈中世〉探求の作業、いわば、「日本人」ないし「大和民族」自前の〈近代化〉の経路の考究は、これより四半世紀以上経過した「東方の門」(昭和一八)執筆段階でも継続されていくこととなる。そして、日本の真正の〈近代化〉のために「私」がここで誓約した〈心の革命〉への意志を、後に登場し

てくる保田は「明治の精神」と呼び、〈現在〉の日本の精神的支柱Ⅱ〈偉大な敗北の系譜〉と位置付けていく。またそのために「私」が獲得した、「私」を見るもう一人の「私」Ⅱ「エトランゼエ」の眼差しを、保田ら日本浪曼派が駆使することになる「イロニー」の先駆的形態とすることもできるだろう。^(注58)

もちろん、これまでの研究史において殆ど顧みられることなかった、藤村から日本浪曼派へという思想的・方法的系譜性をここで確認することで、日中戦争以降の時局下における藤村の思考の〈不確か〉な部分を、保田のそれで代替させようというわけではない。しかし、竹内好がいうように、「民族の問題」が「それが無視されたときに問題となる性質のもの」であれば、藤村が「民族意識」Ⅱ「素朴なナシヨナリズムの心情」を発動させた「海へ」執筆時点で感じた〈抑圧〉の構造を分析し、その〈抑圧〉意識の変遷と、日本浪曼派の躍進などに表象される〈抑圧〉意識の隆起との関わりを見極めることは、アジア・太平洋戦争に対する藤村の心性を分析する上で有益な作業であるう。

もちろん、そうした作業自体は本稿の構想を遥かに超えるものではあるが、欧州から帰国した藤村の言説に見られたアジア主義の萌芽が、非〈西洋〉の近代を構想する岡倉天心の思想に接近し、その後、戦時体制にことさら抗うことなく〈大東亜共栄圏〉思想の方へと漸近した経路を明らかにすることを今後の課題としたい。こうした経路の解明は「藤村研究」とつて難関^(注59)とされてきたが、戦時下の「天心の思想、あるいは思想家とし

ての天心という問題は、この「日本ロマン派」による利用あるいは発掘を離れては論じられない^(注60)とされるように、やはり日本浪曼派の天心受容の問題とともに考察する必要があるだろう。しかし、藤村の状況追認ともとれる態度は、無限の自己相対化・自己否定を行うことで決断主体たりえないという、「イロニー」という方法に内在的な態度だったのだろうか。これは、保田に代表される日本浪曼派が最後まで「イロニー」という方法を手放さず、すなわち決断主体となることを巧みに回避しながらも、単なる状況追認に陥ることなく現体制に批判的立場を取り続けたのとは異質な態度であろう。保田は「この戦争状態を、地上より一掃する大なる掃除機は、彼等（稿者注、欧米の戦争指導者）の人力の内にあるものではない」として、〈近代〉テクノロジーの究極の一形態である近代兵器による戦争終結を否定する。これは富国強兵を唱えた明治維新以来の「文明開化の論理」Ⅱ現体制の論理の否定でもあるが、その一方で「わが国民の出で立つ兵士たちが、戦争の人為的一掃を考へず」^(注61)出征してゆく姿、すなわち、まともな近代兵器も持たずに黙したまま、死を決意し戦地に赴く姿を美的に表象しながら、そこに「皇御軍必勝」Ⅱ〈偉大な敗北〉を見出していきるのである。

藤村は、内なる「エトランゼエ」の行方を見失うことなく最後まで対話を続けていたのだろうか、そのあたりの見極めが必要であろう。

注

的な論文であるという。

(1) 服部之総は評論「青山半蔵 明治絶対主義の下部構造」

〔服部之総全集10 絶対主義の史的展開〕福村出版、昭和四九・一。初出は『文学評論』昭和二九・一)において、『東方の門』への転落(三四三頁)ということを反復的に発言

しているが、それが「大日本帝国主義」(「大日本帝国主義」政治史についての覚え書(二)―絶対主義的侵略主義について)、『服部之総全集19 日本帝国主義論』昭和四九・一、六〇頁。初出は『世界評論』昭和二四・五)と服部が

呼称する思考に接続するものだったことについては、拙稿『歴史と歴史文学―服部之総「青山半蔵」を読む』(『島崎藤村研究』平成二六・九、二五頁)を参照されたい。

(2) 猪野謙二『島崎藤村』要書房、昭和二九・二、八八頁

(3) 吉本隆明「『東方の門』私感」『群像日本の作家4 島崎藤村』小学館、平成四・二、一八五頁。初出は『文芸読本 島崎藤村』瀬沼茂樹編、河出書房新社、昭和三七・一〇。

(4) マイケル・ボーダッシュ「転向と近代日本文学史という物語の成立」『近代の夢と知性 文学・思想の昭和一〇年前後1925〜1945』文学・思想懇話会編、平成二二・一〇、三五二頁

(5) 注(6)に示す目野論文によれば、剣持武彦「文明批評家・島崎藤村」『島崎藤村 文明批評と詩と小説と』双文社出版、平成八・一〇)、細川正義「島崎藤村『東方の門』論―藤村における東と西―」『日本文藝研究』平成一六・二)が代表

(6) 目野由希「『東方の門』執筆前の藤村」『島崎藤村研究』平成一九・一〇、三七頁

(7) 中島岳志『アジア主義 その先の近代へ』潮出版社、平成二六・七、三〇〜三二頁

(8) 竹内は「近代の超克」(『近代日本思想講座7 近代化と伝統』筑摩書房、昭和三四・一一)において、アジア・太平洋戦争は「植民地侵略戦争であると同時に、対帝国主義の戦争でもあった」(『竹内好全集8』筑摩書房、昭和五五・一〇、三三頁)とその二重性を指摘している。

(9) 岡倉天心「日本の覚醒」『岡倉天心全集 天之巻』聖文閣、昭和一〇・二、二二七頁

(10) 岡倉天心「東洋の理想(アジアは一なり)」『岡倉天心全集 天之巻』聖文閣、昭和一〇・二、一頁

(11) 松本健一『竹内好「日本のアジア主義」精読』岩波書店、平成二二・六、九八頁。竹内好「日本のアジア主義」は、竹内「アジア主義の展望」を改題したもの。

(12) 柄谷行人「『戦前』の思考」講談社、平成一三・三、一〇〇頁

(13) 浅野晃は、三・一五事件(昭和三年)で検挙され翌年転向『日本浪曼派』同人にはなっていないものの、日本浪曼派に急接近している。本稿でも論じる保田與重郎「明治の精神」(『文芸』昭和一二・二〜四)における岡倉天心論に感銘を受けた、『岡倉天心論攷』(思潮社、昭和一四・一〇)を執筆した

他、『東洋の理想』（創元社、昭和一三・二）など天心の英文著作を多数翻訳し、また『岡倉天心全集6』（聖文閣、昭和一四）の編纂を通して、天心を紹介した。ただし、「アジアは一つである。」というテーゼを国策スローガンとして転用していく同時代の有り様に、日本浪漫派の天心観は対立していく。

(14) 河田和子『戦時下の文学と（日本的なもの）——横光利一と保田與重郎——』（花書院、平成二一・三）は、「（日本的なもの）の問題規制と戦時下の〈近代の超克〉論議を一続きのものとして捉える」（一六頁）視座を提出している。

(15) 渡辺一民『林立夫とその時代』岩波書店、昭和六三・七、八五頁

(16) 中山弘明『戦間期の『夜明け前』現象としての世界戦争』双文社出版、平成二四・一〇、一〇頁

(17) 竹内好は、前掲「近代の超克」において、座談会「近代の超克」の出席者を「京都学派」、「日本ロマン派」、「文学界」の三グループに分類したうえで、実質的に「文学界」は「日本ロマン派」に統合されるとし、「京都学派」の主張を座談会を欠席・辞退した高山岩男のそれに代表させ、「日本ロマン派」の主張を同じく座談会を欠席・辞退した保田與重郎のそれに代表させている。

(18) 「三つの集ひ」「文芸院」問題 懇談の夕」『東京朝日新聞』昭和九・一・三〇、七面

(19) 海野福寿「一九三〇年代の文芸統制 松本学と文芸懇話

会」『駿台史學』昭和五六・三、一二頁

(20) 中島健蔵『回想の文学2 物情騒然の巻』平凡社、昭和五二・六、九四頁

(21) 広津和郎『続年月のあしおと』『広津和郎全集12』中央公論社、昭和四九・三、三三〇～三三三頁

(22) 副田賢二「痕跡としての「文学」——文芸懇話会における文学（展示）の様相」『展示される文学 近代文学合同研究会論集4』平成一九・一〇、五四頁

(23) 昭和九年九月一九日付の松本学の日記（『近代日本史料選書11 松本学 日記』伊藤隆・広瀬順昭編、山川出版社、平成七・二、六六頁）。

(24) 坪井秀人「第九章 声の祝祭——戦争詩の時代——」『声の祝祭 日本近代詩と戦争』名古屋大学出版会、平成九・八、一七三～一七四頁

(25) 前掲『松本学 日記』八九頁

(26) 同前一〇八頁。昭和一〇年七月一七日付日記。

(27) 同前二二二頁。昭和一二年六月七日付日記。

(28) 佐藤春夫「近時夕語」『定本 佐藤春夫全集21』臨川書店、平成一一・五、三六九頁。初出は、『報知新聞』昭和一一・八・三〇～三〇六。

(29) 林房雄「新日本文化の会 その成立と目的への私見【上】」『読売新聞』昭和一二・七・二七、五面

(30) 萩原朔太郎「透谷文学賞の設立について」『読売新聞』昭和一一・九・二四、夕刊四面

- (31) 勝本清一郎「透谷の文学的立場」『近代文学ノート1』み
ずず書房、昭和五四・七、一〇頁。初出は、『東京民報』昭和
二二・一・一五〜一六。
- (32) 勝本清一郎「藤村の憶い出」『近代文学ノート1』みずず
書房、昭和五四・七、三二五頁。初出は、『東京新聞』昭
二二・八・二二。
- (33) 亀井勝一郎『島崎藤村論』新潮社、昭和三一・一、
二二一頁
- (34) 透谷会の設立を主導した中河與一の理念については、拙
稿「盗まれた〈透谷〉」という問題―透谷文学賞の設立とその
理念」(『北村透谷研究』平成二一・六)を参照されたい。
- (35) 前掲、河田「戦時下の文学と〈日本的なもの〉―横光利
一と保田與重郎―」(七〜八頁)及び、河田が作成した「昭
和初年・一〇年代の〈日本的なもの〉に関する主要文献一覧」
(二七五〜二八六頁)を参照。
- (36) 拙稿「彷徨える〈青年〉的身体とロゴス―三木清(ヘュー
マニズム論)における伝統と近代」『三田國文』平成
二二・二二、一四〜一五頁
- (37) ケヴィン・マイケル・ドーク作成の『日本浪漫派』同人
一覽」(『日本浪漫派とナシヨナリズム』柏書房、平成
一一・四、一三九頁)にも「関係者」として名が上がついて
いる。
- (38) 三木清「知識階級と伝統の問題」『中央公論』昭和一一・四
(39) 浅野晃「文化の擁護」『新評論』昭和一一・二二、七九頁
- (40) 浅野晃「国民文学論出でよ」『新評論』昭和一一・三三、
四二頁
- (41) 山田広昭は『三点確保 ロマン主義とナシヨナリズム』(新
曜社、平成一三・一一)において、「ロマン主義はつねにあ
る欠如のまわりに生まれる。(中略)ロマン主義とは欠如か
ら価値をつくり出すシステムである。このシステムは通常、
それを非常に単純な操作によっておこなう。欠如をさまざま
な方策を用いて糊塗しようとするかわりに、それは、欠如そ
れ自体を、一挙に、「想像的に」、積極的な価値へと反転させ
る。」(一一八頁)としている。
- (42) 浅野晃「漱石の個人主義」『新評論』昭和一二・五、二九
〜三一頁
- (43) 酒井直樹「死産される日本語・日本人 「日本」の歴史―
地政的配置」新曜社、平成八・五、四〜五頁
- (44) 前掲、浅野「漱石の個人主義」二九頁
- (45) 三木清「時局と思想の動向」『改造』昭和一一・四、
一〇七頁
- (46) 林房雄「新日本主義論争の意義」『読売新聞』昭和一二・
三・二八、五面
- (47) 浅野晃「明治七十年」『新評論』昭和一二・四、四一頁
- (48) 林房雄「日本主義論争の鍵」『文芸』昭和一二・五、七〇
〜七三頁
- (49) 保田與重郎「日本的なもの」批評について―文芸三号に
現れた「日本的なもの」についての総括批評―『文学界』

昭和一二・四、八四頁

(50) 中河の「永遠思想」については、拙稿「戦時下日本浪漫派言説の横顔―中河與一の〈永遠思想〉、変奏される〈リアリズム〉」(『三田國文』平成二二・一二)を参照されたい。

(51) 中河與一「保田與重郎」『日本の理想』白水社、昭和一三・五、一二〇頁。初出は『日本浪漫派』昭和一二・一。

(52) 保田與重郎「文芸時評」『新日本』昭和一三・一、六四頁

(53) 保田與重郎「透谷に関して」『保田與重郎全集4』講談社、昭和六一・二、三一五―三一六頁。初出は『文芸懇話会』昭和一一・一二。

(54) 保田與重郎「緒言」『保田與重郎全集5』講談社、昭和六一・三、九―一〇頁。子安宣邦は『近代の超克』とは何か

(『青土社、平成二〇・五』において、保田の「我国に於ける浪漫主義の概観」(『現代文章講座6』三笠書房、昭和一五・九)における「肉体による詩的表現」との表現に注目し、「肉体による詩的表現」という青年将校たちの軍事的叛乱と、(肉体によらざる詩的表現)という日本浪漫派の文学運動とを、保田たちとともに日本の頽廃に対する叛乱として同じ位置においたのである。」としている。こうした詩人と兵士の表象の連鎖は、(詩人＝英雄)と考える保田においてしばしば反復されるが、同様の表象形式は中河與一の透谷表象へとそのまま継承されていく。中河は透谷文学賞受賞後、(物質主義)に抗した透谷と日中戦争に「応召する兵士」とを、ともに(熱情・永遠)を表現したという位相で同列化し、(民

族的全体主義)の名辞に於いて顕彰していく(「文学賞を受けて」『日本の理想』白水社、昭和一三・五)。詳しくは、前掲、拙稿「盗まれた〈透谷〉という問題―透谷文学賞の設立とその理念」を参照されたい。

(55) 保田與重郎「戴冠詩人の御一人者」『保田與重郎全集5』三三二頁

(56) 同前

(57) 同前、三一頁

(58) 同前、二六頁

(59) 保田與重郎「蒙疆」『保田與重郎全集16』講談社、昭和六一・二、一九一頁

(60) 前掲、保田「戴冠詩人の御一人者」二〇頁

(61) 同前、二二頁

(62) 同前、二七頁

(63) 保田與重郎「有羞の詩」『保田與重郎全集3』講談社、昭和六一・一、一三一頁。初出は、『コギト』昭和一〇・八。

(64) 保田與重郎「明治の精神」『保田與重郎全集5』講談社、二五一頁。初出は、『文芸』昭和一二・二―四。

(65) 同前、二五一頁

(66) 同前、二四一頁

(67) 同前、二四〇頁

(68) 桶谷秀昭「保田與重郎」講談社、平成八・一二、一〇一―一〇二頁

(69) 前掲、保田「明治の精神」二三九頁

(70) 同前、二五一頁

(71) 同前、一三六頁

(72) 同前、一三七頁

(73) 同前、一三三頁

(74) 同前、二五一頁

(75) 同前、一九八頁

(76) 同前、二二五頁

(77) 同前、二二三頁

(78) 「海へ」は五章からなり、初出は以下の通り。「海へ」『中央公論』大正六・四。「地中海の旅」『中央公論』大正六・六、一〇。「燕のごとく帰る」『中央公論』大正六・九。「故国を見るまで」『中央公論』大正七・四。「故国に帰りにて」『東京朝日新聞』大正五・九・五〜一・一九。

(79) 島崎藤村「海へ」『島崎藤村全集8』筑摩書房、昭和四二・六、二二二〜二二三頁

(80) 今谷明『封建制の文明史観』PHP研究所、平成二〇・一一、一三七頁

(81) 島崎藤村「回顧（父を追想して書いた国学上の私見）」『島崎藤村全集13』筑摩書房、昭和四二・九、四七一頁

(82) 酒井一臣「文明国標準」の南洋観―大正時代における一教授の認識―『立命館言語文化研究』平成二二・三、七〇頁

(83) 島崎藤村「文学にあらはれたる国民性の一面」『島崎藤村全集9』筑摩書房、昭和四二・七、一一二〜一一三頁。初出

は、『解放』大正一〇・四。

(84) 十川信介「解説」『藤村文明論集』岩波書店、昭和六三・七、三六三頁

(85) 前掲、藤村「海へ」一一三頁

(86) 同前、五頁

(87) 岩見照代「旅人をして旅の心を盡さしめよ―藤村における〈エトランゼエ〉体験―」『日本文学』平成三・一一、二五頁

(88) 野坂昭雄「保田與重郎試論―初期評論における「欠如」と「イロニイ」」『昭和文学研究』平成九・七、五〇頁

(89) 仲正昌樹『モデルネの葛藤』ドイツ・ロマン派の〈花粉〉からデリダの〈散種〉へ』御茶の水書房、平成一三・一〇、二二七頁

(90) 前掲、藤村「海へ」一一三頁

(91) 同前、一四五頁

(92) 同前、一八五頁

(93) 同前

(94) 同前、一八〇頁

(95) 橋川文三は保田の思考を支えている有力な基盤として「マルクス主義、国学、ドイツ・ロマン派の三要因」（『新装版』増補 日本浪漫派批判序説』未來社、平成七・八、三八頁）を挙げたが、ここに藤村の〈近代化論〉を重要なフアクターとして加味する必要があるのではないか。保田が「未完成の日本の支へを（中略）後年の小説家（稿者注、藤村）に僕ら

の少年は味つた」(前掲、「明治の精神」二四一頁)として
ることが(保田は明治四三「一九一〇」年生まれである)、
そうした考えの一つの根拠となるかもしれない。

(96) 竹内好「近代主義と民族の問題」『竹内好全集7』筑摩書
房、昭和五六・二、三四頁。初出は、『文学』昭和二六・九。

(97) 同前、三二頁

(98) 同前、三四頁

(99) 平林一「島崎藤村／文明論的考察」『暁印書館』平成
一一・五、六一頁

(100) 竹内好「岡倉天心」『竹内好全集8』筑摩書房、昭和
五五・一〇、一六五頁。初出は、『朝日ジャーナル』昭和
三七・五。

(101) 保田與重郎「校注 祝詞」『保田與重郎全集21』講談社、
昭和六二・七、四三三頁。初出は、私家版、昭和一九・四。

(102) 同前、四三三～四三四頁

(103) 同前、四三四頁

【附記】本研究はJSPS科研費15K16682の助成を受けたも
のであるが、本稿の発想の一部は、平成二三年に慶應義塾大
学に提出した博士學位論文『作家』という近代―北村透谷・
浪漫主義』による。また、第四〇回島崎藤村学会全国大会(藤
村没後七〇年記念横浜大会、神奈川近代文学館、平成
二五・九・二八)での口頭発表「昭和一〇年前後、藤村の(日
本的なるもの)―国学と日本浪漫派との接点を視野に入れて」

にも一部依拠している。会場で貴重なご教示を賜ったことに
感謝申し上げる。

なお、言説の引用に際し、旧字は適宜新字に改め、圈点・
ルビ等は一部省略した。

(くろだ しゅんたろう・本学教員)